

19	安城	梨の里小学校	ワタベ ショウタ 名 前 渡部 祥大
分科会番号	3	分科会名	社会科教育 (小学校)

研究題目

自らの学習課題をもち、学んだことを自分の言葉で整理し、一般化できる児童の育成

1 テーマ設定の理由

本学級の児童は、社会科の授業において提示された課題や身近な話題に関心をもち、調べたり発表したりする活動に意欲的な姿が見られる。特に日常生活とのつながりを感じられる学習では、積極的に取り組む様子が窺える。I C T機器の扱いにも慣れており、インターネットを活用した情報収集やスライド作成も進んで行うことができる。また、国語科で見出し作りの経験があり、言葉で伝えることの面白さや工夫の大切さを感じていることが、振り返りや授業の様子からも読み取れる。

一方で、調べたことを深く考えずにスライド等にまとめてしまうため、質問されても答えられなかったり、同じ内容を調べていても自分の意見との関わりを見出せなかったりする場面がある。こうした背景には、授業に対する主体性の低さがあると考えられる。4月に「楽しい授業とはどんな授業か」を調査したところ、「授業は先生がつくるもの」「分からないことは先生が教えてくれる」という意識が強く、「みんなで授業をつくる」「友達と学ぶ」という意識は低かった。つまり、児童は課題に対して努力するものの、学習を自分の問いや疑問と結びつけることが難しい状況にあると考えられる。

そこで本研究のテーマを「自らの学習課題をもち、学んだことを自分の言葉で整理し、一般化できる児童の育成」と設定した。

2 テーマに迫る基本的な考え方

(1) 研究の仮説

【仮説1】

- ・単元の導入（つかむ）の段階で、児童の問いや疑問を基に追究課題を設定することで、学びに対する主体性が高まるだろう。

○児童が問いや疑問をもって学習に向かうための手立て

仮説1に対する手立て①

資料提示後に児童の発言を基に、単元を貫く学習課題とそれを解決するための個人で追究する学習問題を設定する。児童が主体的に学習を進めるためには、学習の始めに「何を明らかにしたいのか」を明確化することが大切であると考えた。そこで、児童の問いや疑問を基に学習課題を設定することで、自分が解決したい課題を意識しながら学習を進め、見通しをもって学習を進めることができると考えた。また、北海道と沖縄県のどちらを追究したいか自己決定させ、5W1Hを活用し、個人で追究学習問題を設定する場を設ける。さらに、学習問題を立てることが難しい児童にとっては、5W1Hの視点が問いを考えるヒントになり、自分なりの学習問題を設定して、学習に取り組むことができると考える。

【仮説2】

- ・教材のもつ特性を教師が分析し、まとめ（生かす）の場面で比較・分類しながら学びを整理し、自分の言葉で一般化する活動を取り入れることで、社会的な見方・考え方を働かせて考える事ができるだろう。

○まとめ（生かす）の場面で、学びを一般化するための手立て

仮説 2 に対する手立て②

児童の発言を基に、比較・分類しながら板書する。まとめの場面では、単元で追究してきた内容を振り返り、学んだことを自分の言葉で整理し、一般化して表現するなど、社会的な見方・考え方を働かせて活動を重視する。共通点や相違点を整理できるようにする。また、分類した視点の見出しを児童が設定することで、その後の一般化する活動へつなげたい。

（２）仮説・手立ての検証方法

５つの手立ての効果を検証するために、児童 A（以下、A と表記）を抽出児として変容を追うことにする。A は、明るく前向きな性格で、分からないことは友達と解決したいという思いをもっている。普段から「分からない。」「考えることが苦手。」と素直に声に出し友達に聞く姿勢も見られる。インターネットを使って調べたり、スライドにまとめたりする活動は好きであるが、内容の理解よりも、なるべく早く作業を終わらせたいという気持ちが強く、深く考えてまとめることができない。そこで、先に述べた仮説を検証するための手立てを講じることで、友達と関わりながら解決しようとする A の良さを学級全体に広め、他の事象と関連付けて考える力をつけてほしいと願っている。

（３）仮説・手立てを検証する単元

本研究では、単元「あたたかい土地と寒い土地の暮らし」において仮説と手立てを検証する。この単元は、教科書には、「あたたかい地方（沖縄県）の暮らし」「寒い地方（北海道）の暮らし」のどちらか一方を学習し、人々が自然条件に適応して生活していることを学ぶように示されている。今回は２つの地域から児童自身が学びたい地域を選択できる単元を計画した。両地域は気候に特徴があり、いずれも人気の観光地であるため、児童の興味関心を引きやすい。また、既習単元「国土の気候」と関連付けることで、「なぜ寒いのに観光客が集まるのか」「台風で苦労しないのだろうか」といった疑問を児童がもつことが期待できる。こうした疑問をもとに単元を貫く学習課題を設定し、主体的な追究活動を構成することで、調べたことを整理しながら事象を関連づけて考える力を育成したいと考えた。さらに、北海道と沖縄県という対照的な地域を比較することで、自然条件とくらしの関係を多面的に捉える力を高めることができ、比較結果を一般化する活動を通して、気候とくらしの関係という本質的な視点を獲得し、学習した内容を他の地域や事象に当てはめて考える力を育成したいと考えた。

（４）単元構想図

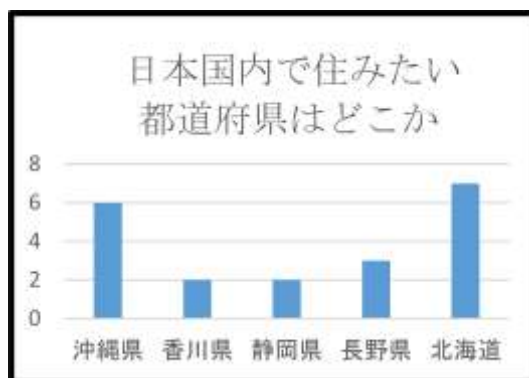
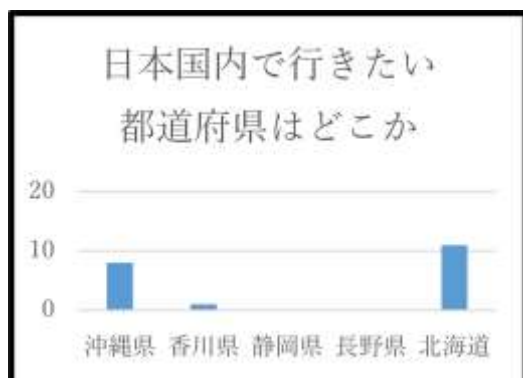
	児童の活動
つかむ	日本の気候にはどんな違いがあるのかな① つゆや台風、季節風は気候にどんな影響をあたえるのかな② 日本の気候にはどんな特色があるのかな③ 調べたいテーマを決めよう④
深める	自分が決めたテーマについて追究し、まとめよう⑤⑥⑦ 追究したことを発表しよう⑧⑨
生かす	発表を聞いて分かったことを伝え合おう⑩ なぜ沖縄と北海道は他の県より魅力があるのかな⑪（本時）

3 実践

（１）児童が問いや疑問をもって学習に向かうための手立て（仮説 1 に迫る手立て）

「日本の気候にはどんな特色があるのかな」（3 / 1 1）では、国土の気候の特色について学習した。児童に「北海道と沖縄県を含む特徴的な気候の 6 つの地域のうち、どの都道府県に行きたいか」と問いかけたところ、北海道と沖縄県が圧倒的に多かった。次に教職員に事前に調査したアンケート結果を提示した（資料 2）。どちらの結果も提示すると、A が「北海道と沖縄県が多いのはなんでだろう」と呟き、それに対して多くの児童が、「たしかに倍以上多いね」、「観光は

分かるけど、住みたい人も多いのが気になる」と発言したため、単元を貫く学習課題を「北海道と沖縄県はなぜ人気があるのか」とし、これを解決するために、調べ学習を進めていくことを確認した。次時から、この課題を黒板に貼り、常に意識できるようにした。



【資料 2】 教職員への事前アンケートの結果

「調べたいテーマを決めよう」(4 / 1 1) の導入時、単元を貫く課題を解決するために、それぞれの地域に分かれて調べることを確認し、「北海道と沖縄県どちらを調べたいですか」と投げかけた。どちらの地域も前時で、多くの児童が行きたいと答えた都道府県であったため、どちらの地域を調べるか真剣に考えている様子が見られた。Aは、しばらく迷っていたが、「沖縄県には行ったことがあるが、北海道には行ったことがないから詳しく調べたい」という理由で北海道を選択した。その他の児童も、「テレビで見て行ってみたいと思ったから」やAとは反対で、「行ったことがあるから」など興味関心やこれまでの経験から、それぞれの都道府県を選択し、追究学習を始めた。選択結果をS k y株式会社の学習支援W e bシステム「スカイメニュークラウド」の「ポジショニング機能」を活用し、各児童の意見を可視化できるようにした。これにより他者がどちらを選んだのか分かり、自然に近くの児童の意見を聞き、交流を始めた。Aは近くに同じ北海道を調べる級友を見つけ、「絶対、食べ物おいしいよね」と北海道について知っている特徴を話していた。

次に、単元を貫く学習課題である「北海道と沖縄県はなぜ人気があるのか」を解決するために、何を調べるべきかを考える時間を設けた。児童からは、特徴的な気候、食べ物、観光地などが候補として挙がり、それを参考に個々に学習問題を設定することにした。

前単元で学習問題を設定する活動を行った際に、自分の問いをもつことができない児童がいた。声を掛けてみると、疑問や興味をもっているものの、それを学習問題として言語化できないことがわかった。そこで5 W 1 H (Who・What・Where・When・Why・How) を取り入れることで、問いを作りやすくなるのではないかと考えた。「沖縄県の有名な食べ物が知りたい」と知りたい気持ちはあるが、5 W 1 Hを入れた学習問題になっていない児童に、「5 W 1 Hが入っていないけど、どれを入れるとよいか」と問いかけると、「沖縄県の有名な食べ物は何があるのか」という学習問題を設定することができた。その結果、沖縄の有名な食べ物をいくつか調べ始めた。

「自分が決めたテーマについて追究し、まとめよう」(5 ~ 7 / 1 1) では、多くの児童が自分の疑問や興味に合わせた学習問題を設定し、個人追究を進めていった。

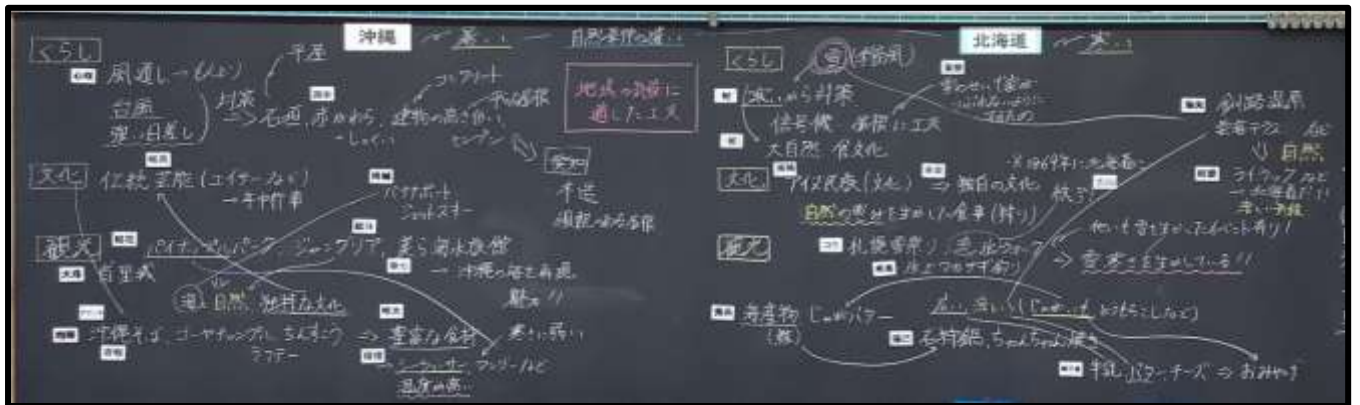
はじめは、「何」「どこ」「いつ」などの一問一答形式の学習問題を設定する児童が多く、一つの学習問題にじっくり取り組む姿が見られなかった。そこで、最初に設定した学習問題を解決した児童には、次の学習問題を設定するよう促した。何度か繰り返すうちに、学習問題は「何」「どこ」「いつ」などの一問一答形式から、「なぜ」「どのように」を含む追究的な学習問題になった。児童に『なぜ』や『どのように』を使った理由を尋ねると、『何』や『どこ』はすぐに調べ終わってしまうから、「北海道の農作物を調べていて、どうやって育てているのか気になったから」と答え、より深い学びを求める姿が見られた。

学習問題を設定する際、学習問題が単元を貫く学習課題の解決につながるかを確認する声掛けも行った。「沖縄県には何個海水浴場があるか」という学習問題を設定した児童に、「その答えが分かったら、沖縄県がなぜ人気なのか分かるかな」と投げかけた。その児童は学習問題を見直し、「沖縄県のビーチはなぜきれいなのか」という学習問題に変更した。「きれいだとなぜ人気の」とさらに問いかけると、「沖縄県の海ではどのようなスポーツを体験できるのか」という学習問題に変更した。問いを明確にしたことで、きれいな海でできる体験などを調べ、それが沖縄県の人気につながることに気づいた。

Aは「北海道の有名な歴史的価値のあるものは何か」という学習問題を設定した。その学習問題にした理由を尋ねると、「他の人が調べていないことを調べたい」と色々な情報を集めることで、学習課題を解決しようとする意欲が感じられた。そしてAの思いを聞いた他の児童も、自分だけの学習問題を設定するようになった。

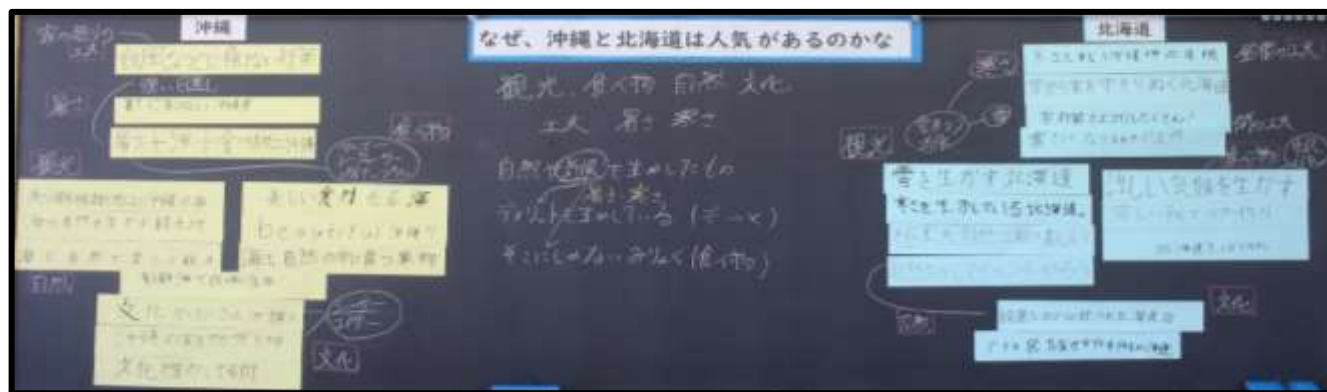
（３）まとめ（生かす）の場面で、学びを一般化するための手立て（仮説２に迫る手立て）

単元「追究したことを発表しよう」（８～９／１１）では、児童が追究した内容に合わせて、黒板に北海道側と沖縄県側を分けて板書した（資料４）。さらに、北海道側と沖縄側を左右に分けて、似ている内容ごとに上から３段階に分けて板書するようにした。また気候に関係する言葉に色を付けたり、関連のある言葉を線で結んだりして、児童の思考を整理できるようにした。その後、板書がどのように整理されているのかを考える時間を設けたことで、児童は、自分たちが追究したことが「くらし」、「文化」、「観光」の３つの視点に分類されていることに気付くことができた。３つの視点に気付いた後、さらに「黒板を見て気が付いたことはありますか」と問いかけると、Aが「北海道は寒い、沖縄県は暑いことを生かしている」と発言し、他の児童からも「どちらも自然を生かしている」「地域の気候に合った工夫をしている」といった意見が出た。児童は、北海道と沖縄県比較することで気候とくらしの関係に着目し始めた。中には、自分たちの住む愛知県と比べる児童や前述のキャッチコピー作成の際に、板書のつながった線の内容に着目して作成する児童もいた。Aは気候と自然との関係を捉え、さらに食べ物のおいしさも伝えようと言葉選びに苦戦していたが、最後に「美味しい食材、光る海」というキャッチコピーを作成した。



【資料４】 追究したことを発表した板書

単元「北海道と沖縄県はなぜ人気があるのかな」（１１／１１）では、寒い土地とあたたかい土地のくらし方について一般化することが狙いである。前時に作成したキャッチコピーの発表から始めた。作ったキャッチコピーを短冊に書き、一人ずつキャッチコピーに込めた思いと共に発表した。児童はキャッチコピーに使われている言葉や込められた思いを基に、似ているキャッチコピーの近くに分類して貼っていった（資料５）。



【資料 5】 児童の発言を基に分類したキャッチコピー

全員の発表が終わった後、「黒板を見て気づいたことはありますか」と問いかけると、「同じじゃん」とつぶやく児童がいた。視点ごとに分類されていることに気付いた児童たちに「それぞれのグループにどんな見出しがつけますか」と問いかけると、「暑さ・寒さ」「自然」「観光」「食べ物」「自然」「文化」の6つの視点が出された。

T：黒板を見て、何か気が付いたことある？

C 1：どちらも家の対策をしている。

C 2：上が工夫で、右が食べ物で、左が自然で、一番下が文化。

児童 A：観光と気温が書いてないよ。あと沖縄に観光が書かれてない。

気温も囲った方がいい。

【資料 6】 キャッチコピーを基に見出し付けをする児童の発言

分類したキャッチコピーや6つの視点を基に、単元を貫く学習課題である「北海道と沖縄県はなぜ人気があるのか」について考えた。児童は整理された板書で情報を見ながら、自分の考えを言葉にしていた。ある児童が、「自然とか気候を生かしたものがある」と発表し、Aも「暑さや寒さという気候のデメリットを生かしている」と発言した。他の児童も「そこにしかない魅力がある」と発言した（資料 7）。それぞれが、単元を貫く学習課題の答えを気候と関連付けて考え、自分の言葉で表すことができた。

T：北海道と沖縄県はなぜ人気があるのか、これまで学習してきたことを生かして考えてみよう。

C 3：自然とか気候を生かしたものがある。

T：続けてどう？

児童 A：暑さとか寒さとかのデメリットを生かして、メリットを多くして、食べ物とか観光を生かしている。

T：気候のデメリットって何？

児童 A：暑すぎる、寒すぎる

C 4：デメリットをメリットに変えている

C 5：沖縄と北海道、それぞれにしかない魅力がある。

T：例えば？

C 5：気候

【資料 7】 視点を基に学びを一般化する児童の発言

4 成果・課題

(1) 手立ての有効性の検証

手立て①については、児童の発言をもとに単元を貫く学習課題を設定し、自分で調べたい地域を選択できるようにした。その結果、追究学習で似た課題をもつ児童に質問したり、情報を共有したりする姿が見られた。児童は自分の興味や疑問をもとに、学びを進める意欲を高め、主体的に課題を追究することができた。Aも自分が疑問に思ったことを調べることになったため、「早く調べたい」と発言していた。また、5W1Hを活用して、個人で学習問題を設定した。5W1Hを活用することで、問いが具体化、明確化され、追究学習を円滑に進めることができた。また、追究学習を進めていく中で、「何」「どこ」などの一問一答形式ではなく、「なぜ」「どのように」と追究的な問いに発展させた児童もいた。限られた時間の中で個人の学習問題を解決することができたのは、5W1Hを活用することで問いが明確になったからではないかと考える。よって、手立て①は有効であったと考えられ、仮説1の妥当性があると判断する。

手立て②については、追究したことを発表する際に、北海道と沖縄県を分けて板書した。それにより、児童は黒板を見比べることで、それぞれの共通点と相違点を抽出することができた。キャッチコピーを貼り出す際に、児童の発言を基に分類しながら、児童自ら似ているキャッチコピーの近くに貼り出した。これにより児童は、自分たちが作成したキャッチコピーが誰のものと近いのか、キーワードを踏まえて整理することができた。発表後や貼り出し後に、児童が見出し付けを行った。これにより児童は自分たちが追究した内容やキャッチコピーをどうまとめることができるのか考え、情報の共通点や本質を捉える力を身につけることができた。作成したキャッチコピーを比較し、単元を貫く学習課題である「北海道と沖縄県はなぜ人気があるのか」という問いの答えを、気候に応じた暮らしをしているという一般化した答えで獲得させることができた。本来であれば、どちらか片方の地域しか学習しないため、「沖縄県は暑さを生かした生活をしている」や「北海道は寒さに負けないような生活をしている」というまとめになるが、今回は単元を複合して行ったため、「どちらの地域もそれぞれの気候を生かした生活をしている」という一般化したまとめになった。以上のことから手立て②は有効であったと考える。よって、仮説2の妥当性もあると判断する。

(2) 今後の課題

一般化した意見を自分たちの生活へ関連付けることの難しさが挙げられる。児童は「北海道と沖縄県のどちらも気候を生かした工夫がある」という一般化には到達したものの、それを自分の地域のくらしや経験と結びつけて考える段階には十分に至らなかった。社会科では、学んだ知識を自分事としてとらえ、地域理解や将来の社会参画につながる学びへ発展させることが重要である。そのために、「自分たちの地域にも気候を生かした工夫はあるか」「寒さ・暑さが生活に与える影響は何か」など、児童の生活とつながる発問を意図的に取り入れることで、他の事象との関連付けができるようにしたい。